

間章 3・5話 紗月のれな子育成日誌

「それで、紗月さんはどこまでいったんですか？」

お昼休み。紗月さんを捕まえて、わたしは声をかけた。

「どこまで？」

「ゲームですよ。恋愛の」

「ああ。けっこう進んだわよ。今、三年の夏かしらね」

「おお……もうすぐクリアーですね！」

先日、紗月さんの家で恋愛ゲームと一緒に遊んだのだ。一緒にというか、紗月さんのプレイを眺めていた、というか。

その際【勉強 0】【運動 0】【容姿 0】の主人公に『甘織れな子』という名前を付けられてしまい、さんざんおちょくられたのだが、それでも紗月さんとゲームの話ができるのは嬉しかった。

「データ見てみる？」

「え、いいんですか。っていうか、学校にまで持ってきているんですか」

「アルバイトの休憩時間にやったりしているから」

「なんと……」

わたしだったら、人前で携帯ゲームやったらオタク趣味がバレる……と思って、絶対にプレイできないけど、むしろ紗月さんのように普段ゲームしない人間のほうが偏見をもっていないのかもしれない。文庫本を開くような感覚、っていうか。

とはいえ、教室で堂々とゲームをプレイするのは、忍びないので。

「あ、それじゃあ、屋上行きましょうよ」

お外はさすがにそろそろ空気が冷たかった。壁に背を預けて、わたしは紗月さんがプレイするゲーム画面を横から覗く。

「今、こんな感じ」

「おー……めっちゃくちゃステータスあがってる！」

「そうね。もうそろそろ甘織れな子とは呼べなくなってきたかもしれないわ」

「そんなことあります??」

レベルアップするとわたしって、甘織れな子じゃなくなるの？ポケモンか？

「他のステータスもそこそこ伸びてて、特に【勉強】はもうカンスト寸前ですねー」

「こないだはようやく学年一位に到達したわ。二位に叩き落されたてびきがわざわざやってくる『負けちゃった。れな子くんすごいね』って、憎しみに満ちた顔で笑いかけてきて気分がよかったわ」

「紗月さんの認知がゆがんでる……」

順位を抜かれた道野てびきさんががんばった主人公を見直す、という心温まるイベントだったはずだけど……。

「次回はおそらくてびきも死に物狂いで学年一位を奪い返しに来るでしょうね。そこからは本当の勝負だわ」

そういうゲームじゃないんだよなあ、と思いつつも、紗月さんが楽しそうなのでによりだった。このゲームが時代を超えて愛されているのは、恋愛要素だけでなく、高校三年間の青春を体験できる学園シミュレーションとしても出来がいいからなのだ。

しかし、やっぱり気になるのは恋愛パート。

「どうですか、生徒会の子との仲は。進展しました？」

「進展と言われても。ただ延々とデートを繰り返しているだけなのよね」

「まあ、そういうゲームですし……」

「高校生の男女が、もともと友達でもないのにふたりで 10 数回以上デートを重ねて、それで特になんのイベントも起きないんだから、完全に脈がないと思うわ。諦めたほうがいいんじゃないかしら、甘織れな子」

「全年齢対象のゲームなので！」

そもそもわたしが真唯と初めてキスをしたのは、初めてふたりでお出かけした日だった。いや、まずプールって、おうちで 2 回遊んだ後だから、4 回目か？でもその途中で、カフェにふたりで行ったりはしたな……。

「いいじゃないですか、高校生らしいピュアな恋愛って感じがして」

「……。そうね」

ただの一般論を振りかざすわたしを見て、紗月さんはなにか言いたげな顔をした。

「なんですか!？」

「いえ、あなたの口から『ピュア』なんて単語が出てきたことに驚きを隠せなかっただけよ。そう、知っていたのね、その言葉を」

「わたしは自分のことをそこそこピュアだと思っているんですけど……」

「ふ」

「鼻で笑われた!？」

そんなことを話しているうちに、ゲーム内で下校いべんとが起きた。相手は紗月さんのヒロイン、紫陽花さん似の生徒会の子だ。

一緒に帰らない？という主人公の誘いは、しかし断られる。

「あれ？」

「瀬名になにかしたの？甘織」

「わたしじゃないですけど！」

現実で紫陽花さんに断られたら『なにか用事があったんだろうなー』としか思わないだろうけど、でも。

「もしかして最近、誘うたびに断られてます？」

「そうね、比較的」

「むむむ……これは、ひょっとして……」

わたしは紗月さんからゲームを借りて、セーブしてから、主人公への評判を見てみた。これは、周囲の女の子が主人公のことをどう思っているのかわかる機能だ。

すると……。

「めっちゃめっちゃ嫌われてる！」

「なにをしたの、甘織」

「だからわたしじゃないですけど！」

現在、登場しているヒロインキャラクターのほとんどから『嫌い』と思われている主人公に、わたしは胃が痛くなる。もう三年の夏なのに……！

「ひょっとして……爆弾が爆発しましたね……？」

「爆弾？」

「このゲーム、かなり特殊なシステムがあって……。あんまり周りの女の子を放置すると、爆弾が爆発して、全員からの好感度がガクッと下がるという……」

「ちょっと言っている意味がわからないのだけれど」

「好きじゃない女の子ともデートして好感度を稼がなきゃダメなんですよ！」

「そんな不誠実なことをしなきゃいけないの？甘織れな子という名前じゃなくても？」

「甘織れな子じゃないとしてもですよ！誰が不誠実だ！」

わたしは頭を抱えた。

三年の夏で全員から嫌われているとなると、個別エンディングを見るのは、ほぼ不可能だ。

「ここから立て直すのは、なかなか厳しいかと……」

恋人を作るという目標を抱いてやってきて、ついには学年一位の座を手に入れるほどに努力した甘織れな子が、しかし知り合った女の子たちを放置したというそれだけで嫌われてしまっていることに、わたしは思わず涙しそうになった。

お前、そんなにがんばってきたのに……人間関係の立ち回りが下手なだけで……。なんて不憫なんだ、甘織れな子……。

「なに勝手に諦めているの、甘織」

「え？」

紗月さんが厳しい目でわたしを見つめている。

「卒業まで、わからないでしょう。あなたのがんばりを認めてくれるひとが、もしかしたらひとりぐらいはいるかもしれないじゃない」

「紗月さん……」

わたしはうるうとした瞳を、紗月さんに向ける。

紗月さんはしっかりとうなずいた。

「最後まで、自分の努力を信じなさい」

「……は、はい！」

その日の夜、紗月さんからメッセージが届いた。

『甘織れな子は誰にも好かれることなく、独りで高校を卒業したわ』

最悪だよ!!

